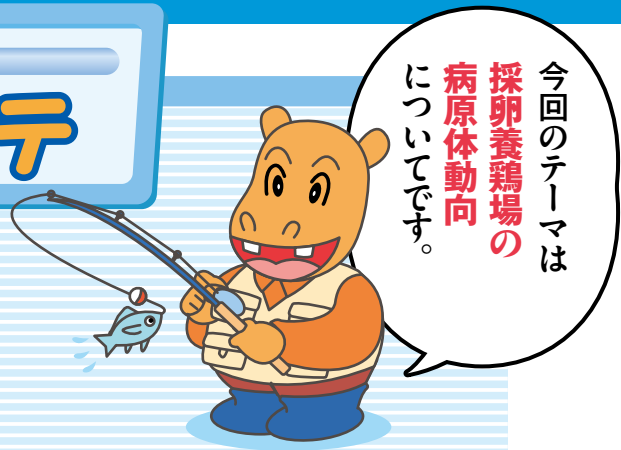


チェック!

日頃の健康診断で 病原体感染を防ぐ



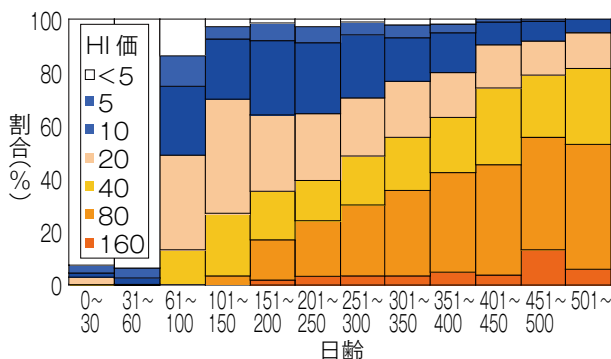
Dr. ジーンのクリニックセンターでは採卵養鶏場において鶏群ごとに一定間隔を設けて行う抗体検査を実施しています。一定間隔で抗体検査を実施することで、ワクチン抗体が付与されているか、病原体に感染して抗体が上昇しているかなどを調べることができます。

今回は 2009 年度の抗体検査結果から生産成績に大きな影響を与えるマイコプラズマ・ガリセプチカム (MG) の動向と、発生報告がまれになっているものの注意すべき伝染性コリーザ A 型菌 (ICA) の動向を紹介します。

●不定期に発生する MG

図 1 に日齢別の MG の* HI 抗体検査結果を示しました。MG は産卵低下など生産性への影響が大きいので、ほとんどの農場でワクチンが使用されています。そのため、ワクチン接種が終了している 101 ~ 150 日齢の抗体保有率は 100% 近くになっています。これ以降、抗体保有率はほぼ 100% で推移していますが、HI 抗体価の内訳は鶏群が日齢を経るに従い異なっていきます。HI 抗体価 10 倍以下の割合は 300 日齢までほぼ変わらないのに対し、40 倍以上の割合は、151 日齢以降右肩上がりが増加しています。このことから、野外の MG に対する感染時期が 300 日齢前後の鶏群もあれば、産卵ピーク前の 150 日齢前後と早期から感染している鶏群もあることが推察されます。

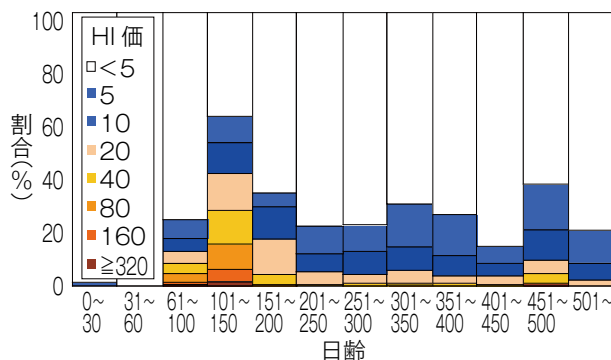
図 1 : MG HI 検査結果集計 (2009年)



● 451 日齢以降、ICA に感染

伝染性コリーザは産卵停止などを引き起こし、大きな被害をもたらしました。しかし、ワクチンの普及により発生は大きく減少し、最近ではまれになっています。このため、ワクチン接種を取りやめた結果、発症した事例も報告されています。図 2 は ICA の HI 抗体検査結果です。101 ~ 150 日齢の抗体保有率はワクチン接種によって 60% を超えています。その後は抗体保有率が 30% 前後で推移。しかし、451 ~ 500 日齢で抗体保有率が 40% に再上昇するとともに HI 抗体価 40 倍以上の割合が増加しています。このことから、伝染性コリーザ A 型菌に対して 451 日齢以降野外感染している鶏群がいることが推察されます。

図 2 : ICA HI 検査結果集計 (2009年)



●農場の状態を把握し、農場ごとの対策を

養鶏場ではワクチンの使用が進んでいるため、病原体の感染が直接被害に結びつくわけではありませんが、一度被害が起こると甚大なものになります。日頃から農場の状況を把握し、被害の発生を未然に防ぐ対策が重要です。抗体検査を活用すると、感染時期の特定や野外感染の有無がわかり、それに基づいた対策がとれます。

クリニックセンターでは定期的な鶏群の健康診断 (クリニック検査) と病気の傾向の把握・対策の提案を実施しています。ぜひ、ご活用ください。

※ HI 抗体検査 : 赤血球凝集抑制反応